

# PACRIM 13参加報告

京都大学大学院 理学研究科化学専攻

金森 主祥

## Participation Report on PACRIM 13

**Kazuyoshi KANAMORI**

*Department of Chemistry, Graduate School of Science, Kyoto University*

### 1. はじめに

2019年10月27日から11月1日まで、環太平洋地域におけるセラミックス協会合同の国際会議である The 13<sup>th</sup> Pacific Rim Conference of Ceramic Societies (PACRIM 13) が行われ、研究室の学生たちとともに参加したので報告する。ご存知の方も多いと思うが、PACRIM は日本、アメリカ、中国、韓国、オーストラリアのセラミックス協会により2年に一度開催されており、1993年にハワイで開催されたのが最初である。13回目となる今回は沖縄県宜野湾市にある沖縄コンベンションセンターにて行われた。那覇空港からは交通の便はそれほど良くなく、路線バスや近隣のホテルまでの空港シャトルバス、あるいはレンタカーやタクシーを利用する

のが簡便であるが、何れにしても時間や料金はかかってしまう。筆者是那覇空港に到着後、路線バスで会場に向かったが1時間半ほどかかってしまった。宿泊施設は会場周辺にもとることはできるが、多くの参加者是那覇市内に滞在しているようであった。沖縄といえば泡盛! ということで筆者も飲食店の多い那覇市内に宿をとったが、今回は会場とモノレール駅のある那覇市内のおもろまち間のシャトルバスが学会によ



会場となった沖縄コンベンションセンター（右奥）と沖縄の美しい海

〒606-8502

京都市左京区北白川追分町

TEL 075-753-7673

FAX 075-753-7673

E-mail: kanamori@kuchem.kyoto-u.ac.jp

り用意されており、那覇市内に宿泊しても朝夕はシャトルバスを利用して簡便に移動することが可能であった。10月末であったが沖縄はまだ暖かく昼間は半袖で行動することが可能であり、会場周辺のビーチでは海水浴を楽しむ人たちもみられた。暖かい場所で会議が行われることは、寒がりの筆者としてはありがたい限りである。

## 2. セッションについて

今回のPACRIMでは、合計36のシンポジウムと2つの特別セッションで構成されており、環境・エネルギー問題など喫緊の課題に取り組む若い世代の研究者らによるセッション、女性研究者を取り巻く様々な問題や課題に関する特別セッションが印象的な取り組みであった。これらのテーマは、若手研究者の育成や公正・平等な研究環境形成という意味で通常のセッションでも常に意識されるべきことであるが、このような機会を設けることで改めて思い出し行動に移すことも重要である。その他、開催されたセッションのトピックは幅広く、例年日本セラミックス協会の年会などで取り上げられているトピックに加え、ポリマーを前駆体とするセラミックス (Polymer Derived Ceramics, PDC)、3Dプリンティング、層状水酸化物、核燃料関連、多孔性セラミックス、文化財の分析、ゲノムセラミックスなどが独立したセッションとして運営されているのが国際会議の特徴的なところであると感じた。筆者の専門分野の関連でいうと、PDCや多孔性セラミックスは、International Congress on Ceramics (ICC)、International Conference and Expo on Advanced Ceramics and Composites (ICACC)、International Conference on Modern Materials and Technologies (CIMTEC) などセラミックス材料系の国際会議に行かないとなかなか情報収集の難しい領域であり、日本には研究者が少ない、あるいは研究が遅れている分野に関する情報を収集できるという点で、国際会議を開催し参加する意

義は高いのだと感じる。

会場となった沖縄コンベンションセンターは非常に大きく立派な会議場であり、それぞれの口頭発表会場で分散して会議が行われている時間帯は（当然ながら！）閑散とした印象であったが、昼食やポスター発表の時間帯には会場であった展示ホールに多くの参加者が集結し、本会議の規模と熱気を感じることができた。

さて、筆者が学生たちと一緒に参加し、発表を行ったのは液相プロセスにおける構造形成と有機-無機ハイブリッド材料に関するセッションである。このセッションは、早稲田大学の菅原義之先生が中心となって企画・運営されたもので、約2日分の時間スロット中に17の招待講演と20の一般講演、そして21のポスター発表により構成されていた（実際にはキャンセルなどもありこの数字よりやや少ないものであった）。余談ではあるが、大学・大学院の学生を指導している筆者としては、日本で開催される国際会議は彼らにとって最高の外交デビュー舞台だと思っている。英語を話すことが苦手な学生がやはり多いが、国内開催の国際会議は参加者も日本人が多いし、それぞれの講演でもネイティブスピーカーたちがものすごい勢いで講演したり討論したりしていることも少なく、威圧感を感じにくいからである。学生たちは過剰に不安と緊張を感じることなく、しっかりと準備をして会場の雰囲気にもあまり飲まれることなく発表を終えることができれば、自信をつけることができる。これが彼らにとって初めの一歩となるのである。

話を戻すと、この液相・ハイブリッドセッションではさまざまなトピックが扱われ、バイオコンポジット、ナノチューブなどナノ構造体、ナノ粒子・ナノ結晶、電極材料、金属有機構造体、エアロゲル、ゼオライト、メソポーラス・マクロポーラス物質、ポリシロキサン・シルセスキオキサン、PDC、表面修飾などなど、物質・手法・物性・機能を問わず非常に幅広い領域における研究発表がなされた。発表件数は思った

ほど多くはなかったものの、この分野の良い面、つまり幅広いトピックを扱っている研究者が集まることを十分に感じさせる内容であった。ちなみに、本会議のようなセラミックス系の国際会議では液相法やハイブリッド材料に関する発表はあまり多くないように思えるが、それは International Sol-Gel Conference や International Conference on Multifunctional, Hybrid and Nanomaterials (HYMA) など規模の大きい他の学会が複数存在するからかもしれない。

### 3. おわりに

筆者は年に数回国際会議に参加しているが、久々に国内開催の国際会議に参加して、開催地が沖縄ということもあり、非常にリラックスした雰囲気を楽しむことができた。毎日の研究室での業務に忙殺されているとなかなか新しいアイデアは浮かんでこないこともあるが、学会に参加して自分の研究成果について積極的に議論するのも、他の研究者の発表をただ受動的に

聞いているのも、夜にお酒を飲みながらくだらない話も交えつつ時に真剣に研究について話をするのも、やはり全てが刺激的である。学生も企業研究者も大学等の研究者もぜひ学会に足を運んで刺激し合い、ともに新しい研究の方向性を見出すことで活発な研究領域を形成したいものである。

### 追記

那覇市の首里城で火災が発生したのは10月31日、本会議のテクニカルプログラム最終日の未明のことであった。その数日前に首里城を訪れた筆者は、ホテルで朝起きてテレビをつけた途端目に入ってきた光景に愕然とし、悪い夢を見ているのではないかとしばらく信じられない思いでテレビを見つめるほかなかった。多くの人々の想いがこもったあの流麗な建物や文化財が失われたことは大変な悲しみであり、やるせない気持ちでいっぱいである。沖縄の方々の気持ちに思いを馳せながら、筆を置くことにする。